

R a d i o Y A M A S H O F M ドラマシテイ

「厚別介護物語」地域・夢・安心」

パーソナリティ 石山建治（社会福祉法人協立いつくしみの会 理事長）
二〇二六年八月二十七日 木曜日
近藤健・近藤恵美子 出演

石 山

八月二十七日木曜日、Radio YAMA S H O F Mドラマシテイ「厚別介護物語」地域・夢・安心」をお送りいたします。お相手は社会福祉法人協立いつくしみの会の石山建治です。この番組は医療、福祉、介護をテーマに各界からゲストをお招きしながら放送いたします。日本国憲法、とりわけ第九条や第二十五条など、平和でこそ国民の権利が守られ、誰もが安心して住み続けられることを発信していきます。

この番組ではお聞きの皆さんからのメールをお待ちしています。番組へのメッセージはメール kaigo@776.fm です。

今夜の厚別介護物語、ゲストに近藤健さん、ペンネームこんけんどうさん、それからEmmyさんこと奥様の恵美子さんをお迎えいたしました。どうぞお二人よろしくお願いいたします。

近藤健、恵美子

よろしく願います。

介護なんです、実はこの番組では介護以外にもたくさんいろんな方たちをお招きしながらお話を伺っています。

文学に関わることでは、宮沢賢治さんのことが出てきたり、その朗読をしていたいたり、春秋賞優秀賞、二〇〇九年一月に第四回文芸思潮エッセイ賞優秀賞と数々の文学賞も受賞され、エッセイの添削指導やさらに一般社団法人随筆春秋の理事などを歴任、真正正銘のエッセイストということ。今日は大変楽しみにしておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。さて、四十歳からエッセイを書かれていますということ、それがそのままずっと未だにしっかりと発展しながら続いているということなので、なぜ四十歳からエッセイだったのかというところから少しお話を伺いたいと思います。

近藤健

いわゆる都会の高校に入って、それでいきなり大学受験、勉強しなきゃいけないというプレッシャーがかかりました。そして、何が苦手だったかという現代国語だったんです。

石 山

近藤健

現代国語ですか。そうですね。しかも作文が、とてつもなく苦手でした。それで受験勉強の中で本を読んだり日記書いたりするようになって、そのままそれがずっと続いていました。

その後、前の妻と結婚し、私が三十八歳の時に妻が精神の病を得てしまい、十二年半入退

それから和歌などいろいろなお話される方もいらつしゃって、私は文学に知識不足でついでいけないのですが、今日はエッセイストということなので、ぜひその随筆家のお話を伺わせてもらいたいなと思っております。どうぞよろしく願います。

近藤健

どうぞよろしく願います。

石 山

簡単に略歴をご紹介させていただきますと、近藤さんは様似町ご出身、浦河よりさらに襟裳岬の方へ向かったところです。ここに中学卒業までお暮らしになって、高校は札幌光星高校、そして大学がなんと京都の龍谷大学の法学部法律学科に行かれて、卒業後、東京の北日本石油に勤務、二〇二〇年、六年前に定年退職、その後いくつかお仕事をされたようです。

そして今日のテーマにもなりますが、会社員この北日本石油で勤務されながら、四十歳からエッセイという分野で創作活動をなさったということ、ここに焦点をあててお話しをお聞きしたいと思っております。

また、この創作活動の中で、著名な作家の佐藤愛子さんとの出会い、また二〇〇三年に随筆

石 山

作文……、苦手な作文を。

近藤健

はい。苦手な作文を（笑）

あの当時、文藝春秋が出している『ベスト・エッセイ集』というのがありまして、新聞や雑誌などに載った全国のエッセイを集めてきて、文藝春秋内で二度の選考会があって、そこを通った作品を今度は日本エッセイスト・クラブの中で二度選考して最終的に六十本にするんです。

石 山

ほう。

近藤健

エッセイのエッセンスみたいな本が一九八三年からずっと続いていて、その本を持っていたんですよ。

石 山

ほう。

近藤健

それを読んで、どうやったらエッセイを書け

るのかなと。小説は無理だろうと思っていたので、エッセイを。その本を読みながら、その勢いで書き出したんです。でも、特に苦手ですから、すぐには書けないわけですよ。

石 山 ああ。

近藤健 すぐ書けないから、一つの作品をです、七
十回も八十回も書き直しながら、ずっとそれに
こだわって書いていくわけですよ。

石 山 ほう。

近藤健 そのうちに書いてることがわけが分からなくな
っちゃって。

石 山 ああ。

近藤健 一度置いておいて別の作品を書き出す、とい
うようにやっていたんです。そんなことを続け
て二年経ったところに、初めてエッセイ賞に応募
しました。

石 山 ほう。

近藤健 四十歳からやり出したというのは、そのころ
のことだったのです。

石 山 なるほど。当時の奥様のいわゆるメンタルな
疾患が原因で、在宅勤務、今でいうリモートワ
ークをやられているうちに、減入るから、たま

たま持っていらしたその本が、エッセイ集だつ
たと。

近藤健 はい。

石 山 それに啓発されて「これやってみよう」と。
だけど苦手だったんですよ。

近藤健 苦手でした。めちゃくちゃ苦手だったんです。

石 山 ほう。

近藤健 興味はあったんで、その本は買ってありまし
た。

石 山 苦手なものにチャレンジしてみようという。

近藤健 ちよつとやってみようかなと。

石 山 なるほど。それやり出して、何ていうんです
か「あ、これいいな」っていうか、熱中し始め
ていくつていうようなプロセスもあるわけです
か。それはどういふような機序でっていうか、
そんなふうになるものなんですか。

近藤健 私が書き出したころ、ホームページが始まっ
たのです。会社で「コーナーを作るから書いて

くれないか」って、社長から頼まれて。そした
ら書いているうちに、なんだか面白くなつてき
たんですよ。

石 山 ああ、なるほど、なるほど。

近藤健 はい。ただ自分が書いているものがこれで本
当にいいのかなっていうのが疑問に思ったのが

二年後くらいなんです。

石 山 なるほど。その四十歳から始めて、結構いろ
いろ苦勞されながら書き始めて、これでいこ

うかっていうふうに、そして一回応募したけれ
ど、本当にこれでいいのかっていう、ちよつと
迷いが起きてきたということなんですか。

近藤健 そうです。

石 山 なるほど。そうすると当時、現代国語が苦手
だっという……、ちよつとこだわってますね。

近藤健 はい（笑）

石 山 苦手だということにもかかわらず、二年間そ
ういうことに集中してやっているうちに、結構
好きなジャンルに変化というか転換できたって
いうことなんですか。

近藤健 そうです。すーっといけたんですよ。ただ、
とにかく一作書くのにめちゃくちゃ苦勞するわ
けです。

石 山 はい、はい。

近藤健 七転八倒しながら溜まってくるわけです。そ
して本当にいいのかどうか分からないわけです。

石 山 なるほど。

近藤健 誰かに背中を押してもらいたくて、ちよつと
応募してみたというわけです。

石 山 なるほど。あの基本的なことをお尋ねしまし
ます。エッセイというものについて何かルールみ
たいなものがあるんでしょうか。

近藤健 あります。たぶん訊かれるだろうと思ってい
ました。訊かれたら何て答えたらいいだろうと
は思っていたんですけど、なかなか分からない
あ、なるほど。

石 山 それで何て答えようかと思って……、ちよつ
と調べたカンペを持ってきたので紹介します。

石 山 どうぞよろしくお願いいたします。

近藤健 筆者自身の体験や思想、感情や発見、自分ら
しい視点と言葉で自由に表現するものをエッセ
イといいます。つまり自分の人生や心を素材に
して、読者の心に響くように書く。

石 山 なるほど。

近藤健 要は、何でもいから自由に書けと。ただし
読者の心に響くように、琴線に触れるように書
かなきゃいけない。日記は、今日何があったか
を書くのがメインじゃないですか。

石山 はい。

近藤健 そうではなくて、その出来事から感じたこと、何を考えたかということ、人生や社会とどう結びつけていくのかというところまで掘り下げる点が日記との違いです。

石山 うーん、なるほど、なるほど。

近藤健 小説との違いは、架空の人物や出来事ではなくて、筆者自身の実体験や実感に核を置いて書くのです。

石山 なるほど。

近藤健 ただフィクションではありません。嘘を言うてはいけないのです（笑）これは文学的誇張といえます。

石山 ああ、なるほど（笑）一番分かりやすいのは日記と違い、自分の心、人生で感じたことを表現し、それを読み手にしっかり伝えることがまずひとつ。フィクションの小説との違いは、文学的誇張はあったにせよ、ノンフィクションから外れないことが大事なんですね。

近藤健 そうです。

石山 初めて伺いました（笑）勉強になります。そういうことになるのですね。

近藤健

はい。自分の体験を読んだ人と共有したい、共感してもらいたいのです。「ああ、確かにそうだなあ」というように感じてもらい心を動かしてもらいたい。それが増えると自分も一人じゃない、読み手も一人じゃないと感じるので。結構、反応があつたりして、それが喜びとなります。

石山

なるほど。イントロから大変参考になりました。勉強になりました。本当にすごいことですね。やっぱり、エッセイストをお招きすると、ちょっと私の知識も上がります。ありがとうございます。

それではここで、一曲リクエスト曲を入れたと思います。近藤健さんのリクエスト曲お送りいたします。

曲 『明日への手紙』 池田綾子

提供

かりぶは特別養護老人ホームからデイサービス、訪問介護、介護まで、トータルな介護サービスを厚別でご提供いたします。住み慣れた街、厚別区で安心して暮らしたいという切実な願い

をお手伝いいたします。かりぶには差額ベッド

などありません。皆様の負担軽減に全力を尽くします。お問い合わせは「社会福祉法人協立いつくしみの会」011-896-1165、011-896-1165、「やーくろうしたけどいろうご」まで。

石山

周波数77・6MHz、Radio YAMASHO FMドラマシテイ「厚別介護物語」地域、夢、安心」をお送りしております。

ただいまの近藤健さんのリクエスト曲は池田綾子『明日への手紙』です。おやつ？ と思われる方もいらっしゃると思いますが、手寫葵さんが歌っている歌で、池田さんが楽曲を提供してるんですね。それをご自身がセルフカバーされているということですね。少しこの曲に対する思い入れをお話いただけますか。近藤健 そもそも池田綾子さんというのは、私の会社の上司のお嬢さんなんです。

石山 ああ、そうですか。

近藤健 私が四十二歳の頃にデビューし、結構テレビのドラマの主題歌などを何曲か歌ったりしてい

ました。メジャーに芽が出なかったのですが、この曲が大ヒットしたんです。札幌でコンサートがあつたときに、恵美子と一緒に会いに行きました。デビューしたころは東京にいて、ラジオなどをよくやるんですよ。初めて私からリクエストしたりしたのが始まりでした。

石山

なるほど、そうですか。この池田綾子さん、私もちょっと存じ上げなかったので、少し調べてみたら、多くの方が気に入っているのがNHKの「にっぽん縦断こころ旅」ですね。

近藤健

そうです。あの曲なんです。最初のメロディを聞いた瞬間に「あつ」と分かる曲ですね。

近藤健

そうです。よつ葉乳業のCMの曲も歌も、ずっとやってましたね。今も時々流れている。

石山

ああ、そうですか。

近藤健

はい。

石山

職場の上司のお嬢さんだったと。

近藤健

そうなんです。

石山

それは親近感は湧きますね。

近藤健

一生懸命応援したんです。

石山

なるほど。CDなんかを出されて、だいぶ有

名になってきましたね。

近藤健 そうですね。有名になりました。よかったです。

石山 さて、冒頭に少し略歴の中でご紹介をさせていただきましたが、今年の四月、一〇二歳でしたか、逝去された作家の佐藤愛子さん。多年にわたるご親交があるということ、どういふ縁でご親交があったのか、ということについてお話しをお聞かせください。

近藤健 はい。四十歳からエッセイを書き始めて、これで本当にいいのかっていうので、ちょっと背中を押してもらいたいなと思って、たまたま公募で見たエッセイ賞に応募したんです。

石山 はい。

近藤健 二〇〇二年に応募したのが第八回随筆春秋賞で、優秀賞をもらってしまったのです。表彰式が二〇〇三年にあり、その最終選考委員が佐藤愛子さんだったのです。

石山 なるほど、そこからの出会いですね。

近藤健 年に二回、同人誌が出るのですが、二〇〇五年から二〇一〇年の間、それを持って佐藤愛子さんのご自宅へ行って、講評してもらったのです。

石山 なるほど、はい。

近藤健 随筆春秋の仲間十人くらいで行くんですけど、これがすごく厳しいのです。

石山 とても厳しそうですね。

近藤健 はい。とても厳しいんですけども。その中で私が四十代前半で一番若かったんですよ。四十代の私のしんがりから八十代の方まで。

石山 ああ。

近藤健 北海道出身だったということ……。

石山 なるほど。

近藤健 鼠^{ねずみ}肩^{かた}にしてくるわけですよ。

石山 なるほど。

近藤健 なぜかという、佐藤愛子さんは、浦河町に別荘を持っていたんですよ。

石山 ああ、そうでしたね。

近藤健 様似町の隣の町なんですよ。私が高校一年のときかな、できたのは。そんな有名人がいない町に別荘があるんで、町の人が「いや、別荘（滅相）もございません」とよく口にしているのを聞いてました（笑）

石山 なるほど。

近藤健 そういうご縁に恵まれて、二〇一〇年まで、

年に二度、伺っていました。

石山 うん。

近藤健 私は二〇一一年三月一日に転勤で室蘭に来ました。

石山 ああ、はい。

近藤健 室蘭に来て翌年二〇一二年から、今度は夏に浦河の別荘を訪ねるようになりました。それは二〇一九年まで続きました。

石山 うん、うん。

近藤健 佐藤愛子さんが二〇一九年にドクターストップがかかり、（浦河へ行くのは）もうやめた方がいいよと。私が行くと必ず言うのは「近藤さんね、北海道は遠いわ」って。もう、遠くてやってられないと言っんですけど「先生ね、羽田空港から千歳まで一時間半で来れるんですよ。浦河に（別荘を）建てたのが間違いの元なんです」って（笑）

石山 そういうことで二〇一九年まで、浦河へ通っていたんですけれども。最後の年には恵美子も連れていきました。

石山 うん、うん。

近藤健 恵美子はエステやってるもので。

石山 エステですか。

近藤健 私も喋ることもそんなに多くはなくて……、先生にベッドソファに寝てもらって妻にマッサージをしてもらって。

石山 ああ、なるほど。はい。

近藤健 大変喜んでもらえました。

石山 なるほど。

近藤健 それ以降は年に一度、東京で随筆春秋賞の授賞式がありました。実は私、優秀賞をもらってから（随筆春秋に）加入したんですよ。そして授賞式があるたびに佐藤愛子さんのお家にお迎えに上がって、会場までお連れするという役目をしていました。

最後に会ったのは二〇二四年、先生が一〇〇歳になる年です。

石山 ああ、なるほど。

近藤健 長いお付き合いをさせていただきました。

石山 そうですか。近藤さんがエッセイを書き始めた四十歳から。

近藤健 はい。

石山 実は二〇二三年十一月十日の朝日新聞にインタビュー記事がありまして、読ませていただい

たら、その中に「忙しい時期のことはほとんど覚えていませんね。出来事があまりに激しい場合は、それを自分の中で面白く書き換える、楽しい話に変えちゃうんですよ」という……。

近藤健 はい。

石 山 近藤さんのお話を伺って、エッセイというのは何か、ということに関わるような記事だったなと思いました。

それから、もう一つ「全生涯で一番の幸福」という文章の中に「二階から『おう』という父の大きな、父の太い声が戻ってきた。これが幸福の源泉。何気ない光景の中で幸せがあったんだっていうことを、紆余曲折の人生を生きてくるとしみじみと思えるわけです」って、エッセイってこういうものなのかなって、改めてこの佐藤愛子さんのインタビュー記事を読みながら、近藤さんのエッセイとは何かというお話を伺い、ちよつと一歩踏み込めた、かな（笑）

近藤健 はい（笑）

石 山 気がいたしました。なかなかの素敵の方ですね、この佐藤愛子さんという方は。素晴らしいですね。あの映画、何というタイトルでしたっ

け？

近藤健 『九十歳。何がめでたい』。

石 山 何がめでたいかっていう、観たことはありますが、忠実に描いてるかどうか分かりませんが、雰囲気はあんな感じだったんでしょかね？

近藤健 そう、まさにあんな感じですよ。

石 山 あんな感じですか、やっぱり。かなり超辛口で。どこかだけど、（映画を観ていて）最後、何を言ってくるのかっていう、ちよつと、こう覗き見したくなるようなものになっていますね。

近藤健 はい、はい。

石 山 なるほど、そういうことですか。出会いとご経験をなさったということなんですね。

近藤健 ええ。

石 山 このエッセイで佐藤愛子さんの厳しさっていうことも、添削指導であつたと思うんです。

近藤健 はい。

石 山 どんなふうに具体的に言われるんでしょうか？

近藤健 まず、説明はするな、と。

石 山 ああ、くどいような、うん、うん。

近藤健 そうです。そんな説明書を書いてるみたいな

文章は書くな、と。映像を、目の前に見えるように書け、と言うんです。映像を切り取れと。

石 山 なるほど。

近藤健 おいしいケーキを食べて「おいしい、おいしい」って言っても、全く相手においしさが伝わらないでしょ、と。

「おいしい」っていうのは、読んだ人が感じ取ればいいことであって、書く者はいかに「おいしい」という言葉を使わずに描くか。

石 山 なるほど。

近藤健 それから「余計なことは書くな」と。とにかく切り捨てろと。

石 山 余計なことは書くな。ああ。

近藤健 どんどん切り捨てて、読者に行間を読ませろっていうんです。一から十まで書いてもどうしようもないし、つまらない。ぎゅっと縮めて、書かないところを読んでもらう。それが大事です、と。

石 山 はい。

近藤健 また、道草を食えって言うんですよ。つまり、遠足に行ったら「今日は何時からどこ集合して、遠足行って、何を食べて」という説明はいらな

いと。いきなり本題から入ってきなさい、と。

石 山 うん、なるほど、うん。

近藤健 要は狭く深く掘り下げて。

石 山 なるほど。

近藤健 掘れって。だから、私もいろんな、佐藤愛子さんだけじゃなくて他の方からも文章指導を受けたりしていましたが、すごく印象に残ったのが「文学の力」という、それは佐藤愛子さんも同じことを言ってます。例えば、あの『火垂るの墓』という映画があるじゃないですか。

石 山 はい。

近藤健 主人公は子供ですよ。戦争反対なんて言っていないじゃないですか。全く言っていないんだけど、あれを見た人は、紅涙を流すっていうか、もう涙しながらですね、戦争とは何と残酷なものなんだと。そして絶対に戦争はやらないっていうように感じるわけです。

石 山 うん、うん。

近藤健 全く言っていないのに感じます。

石 山 うん、うん、うん。

近藤健 それが文学の力ですよ、と。

石 山 なるほど。ええ。

近藤健 ただ、それを実際書けと言われてもね、これが難しい。言うのとやるのがね（笑）

石 山 それはどの世界に行っても同じことですね。

近藤健 はい、はい。

石 山 なるほど。やっぱり文学というのは奥が深いものなのですね。

近藤健 （笑）

石 山 素晴らしい。

それでは今夜の二曲目、恵美子さんのリクエスト曲をお願いします。

曲 『カノホナ・ピリカイ』 ケアリイ・レイシエル

提供 かりぶは特別養護老人ホームからデイサービス、訪問介護、介護まで、トータルな介護サービスを提供いたします。住み慣れた街、厚別区で安心して暮らしたいという切実な願いをお手伝いいたします。かりぶには差額ベッドなどありません。皆様の負担軽減に全力を尽くします。お問い合わせは「社会福祉法人協立いつくしみの会」011-896-1165、011-896-1165、「やーくろうしたけ

どいろいろご」まで。

石 山 周波数77・6MHz、Radio YAMASHO FMドラマシテイ「厚別介護物語」地域、夢、安心」をお送りしております。

石 山 えー、ただいまの曲は、ケアリイ・レイシエルで『カノホナ・ピリカイ』でいいでしょうか？

恵美子 ピリカイで。

石 山 ピリカイでいいでしょうか。少しコメントをいただければと思います。

恵美子 いや、そんなコメントはないんですけど（笑）えーっと、私一応フラダンサーでもあって、二十五年やってるんですよ。

石 山 ああ。

恵美子 ええ。それで、最初の頃これを習ったんですけど、日本ではBEGINさんとかが歌われた『涙そうそう』。

石 山 『涙そうそう』ですね。

恵美子 それをカバーしてる、このハワイの曲。もうハワイ好きの人とか、フラダンサーであれば皆さん知っている曲ではあるんですけど、この曲

の内容ってというのがやっぱり海なんです。海辺に育った方なんですけど、おばあちゃんに育てられた。私も海と山で育った。近藤健さんもそうですね。

石 山 そう、海なんです。

近藤健 恵美子は、寿都です。

石 山 あ、なるほど。寿都で、両方海ですね（笑）

恵美子 日本海と太平洋と。そんな感じで、おばあちゃんを想った曲っていうところで、大好きな曲をリクエストさせていただきました。

石 山 なるほど。その太平洋と日本海が会合うっていうのも、またいいですね。

近藤健 そうです（太平洋と日本海がぶつかる）津軽海峡ですね（笑）

石 山 （笑）奥様の恵美子さんは、近藤さんの本の中で、装画、表紙絵と挿し絵でしょうか、担当されているということなんですが、どこかで絵を学ばれたんでしょうか？

恵美子 特にないです、独学です。

石 山 独学！ いや素晴らしいですね。第2集の本を見せていただいたら、絵本みたいですね。

恵美子 ありがとうございます。

石 山 いや、ちょっとびっくりしました。

恵美子 それもやっぱり、先ほどから仰っていましたけれど、中身を読まないで、この映像が浮かばないっていう、そういうところから描かせていただいています。

石 山 なるほど。やっぱりそうですね。僕はあんまり存じ上げなかったのですが、エステ関係の仕事をしてるのは、エステに出会い、自分の手でお客様がきれいになっていく喜びを感じるようになり、そしてエンゼルメイクもできるようになった。そのことが絵を描くことにもつながっている、ということですね。それによって近藤さんの執筆をサポートされ、自分の琴線に触れるような内容を絵にすることをやっているのですね。

恵美子 はい。描かなくてもいいって言われるんですけど。でもやっぱり私の中ではしっかり伝えたいというか、見せたいというものがあります。

石 山 え？ なんて描かなくていいんですか？

近藤健 あのー、一冊あたり三十本ぐらいのエッセイを載せるのですが、三十本全部描こうとするから「一つ置きでもいいよ」っていう意味なんで

す(笑)

石山 あー、いたわる気持ちで仰って(笑)

近藤健 「それで早く描いてくれ」って(笑) 両方です(笑)

石山 (笑) なるほど、そうでしたか。分かりました。それじゃあ、近藤さんの書かれているものは、もちろん読まれておられて……。どれが一番よかったですか？

恵美子 いやー、どれがっていうか、これから出てきます。今ちようど、第9集が出るのかな？ 第9集が出るんですけど。たぶん、もう少し続くんですけど、そのあたともいいかなと。

石山 ほう。その第9集は、いつ出版予定なんですか？

近藤健 いつって決まっていんです。この秋の予定なんですけど、まあ秋といっても東京の感覚で、十一月も秋ですから(笑) はい。北海道だと冬になるんですけど。まあ今年中にはなんとなるかなって思っていますね。

恵美子 はい。

石山 なるほど。実は、ここの放送局長、☆MAR U☆さんも『O・t o n e』という雑誌です

ね。

近藤健 あ、はい。

石山 毎月エッセイを執筆されてるんです。それで今度、本にされるといふことで、少し、ちょっとアドバイスをいただければと思うんですが、どうでしょうかね？

近藤健 随筆春秋では出版業務もやってるんですよ。サポートをしています。自分史みたいなのを書かれる方とか、エッセイ集を出される方もいるんですけども。多いですよ、最近そういう方が。その手助けをするのも、そのひとつです。あとがきを書かせてもらったりしています。

石山 そうですか。それじゃあ、うちの放送局長が、執筆に行き詰まった時には、ちょっと相談にのっていただけると……。

近藤健 ぜびぜび、どうぞ(笑)

石山 くれぐれもよろしくお願いいたします(笑)

一応そんな予定になっております。

最後にしっかりと聞きしておきたいと思うんですが、エッセイの魅力っていうのを、ご本人は実際の文筆家というかエッセイストなので、もう自分なりに魅力っていうのを感じておられ

ると思うのですが、そういうことと同時に、触れたことがあまりないような人たちに「エッセイはここがいいんだ」というようなお話しをしていただけないものかと、思いますがいかがでしょうか？

近藤健 最高に難しいですね(笑)

エッセイを書く立場からするとすね、書くことによって、自分が自分であることを実感できる、ようになるっていうんですか。

石山 うん。書くという。

近藤健 書くということですね。随筆春秋には会員が一〇〇名ぐらいいるんですよ、その中にはですね、施設に入ってる方も結構いらっしゃる。

石山 うーむ。

近藤健 施設から添削原稿を送ってくるんですよ。東京の事務局を経由して私のほうに転送されて。最近の私はエッセイを書くというより、その添削をするのがね、めっちゃくちゃ多くなりました。

石山 うーむ。

近藤健 (添削を) 始めて十二年ぐらいになるんですけども。ですから年配の方、八十年代、九十年代の方、やっぱり手書きで書いてこられる方も多い

んですけども、一生懸命書いてこられるんですよ。

石山 うん。うん。なるほど。

近藤健 よくアドバイスするんですけども、自分が書いたものを、もう一人の自分にチェックしてもらってください、と。

石山 なるほど。

近藤健 ですから「あなた一人じゃないですよ」っていうような。書きながら自分を発見するように、気がつくっていうか。

石山 そうですね。

近藤健 だんだん体も衰えてきて、どうしようもなくなってくるんですけど、皆さんには「生きていく傍らに、書くことを置いてみませんか」と言っています。つまり「書くことが救いになる」のです。ですから「一緒に書いていきましょう」と頑張ってもらっています。

石山 なるほど。今のお話だと、自分自身を客観化、客体化して、自分自身を見つめるというきっかけになる、そして今この瞬間でなくても過去も含めて、その作業が行えるっていうようなことが、書くことによって味わえるエッセイの魅力

ということなんですか。なるほど。
それでは、まだまだ番組は続きますが、CM
に入ります。

提供

かりぶは特別養護老人ホームからデイサービス、訪問介護、介護まで、トータルな介護サービスを厚別でご提供いたします。住み慣れた街、厚別区で安心して暮らしたいという切実な願いをお手伝いいたします。かりぶには差額ベッドなどありません。皆様の負担軽減に全力を尽くします。お問い合わせは「社会福祉法人協立いつくしみの会」011-896-1165、011-896-1165、「やーくろうしたけ」といろいろごまで。

石山

周波数77・6MHz、Radio YAMASHO FMドラマシテイ「厚別介護物語」地域、夢、安心」をお送りしております。

石山

エッセイのお話っていうのは本当に、文学ということもあるので、深いというか、つけ焼き刃であまり言ってはならないかなと思うんですが、私の番組なのでぜひお許しください。

本当に短いもので、お話しできなかったことがたくさんあると思います。大変失礼いたしました。

このあと引き続き、77・6MHz、Radio YAMASHO FMドラマシテイでお楽しみください。

『まるっとS』というフェスティバルを先週、晴天の中、開催することができました。この場を借りてご来場いただいた皆さんに、感謝申し上げます。この番組は特別養護老人ホームかりぶ・あつべつ、高齢者生活支援ハウス・ケアセンターかりぶ・もみじ台、ケアセンターかりぶ・上野幌の提供でお送りいたしました。

この素人っぽさがまたいいというように自負しているんですけど（笑）玄人だとこれはこれでどうかと思いますので、素人っぽい私がいろいろ聞かせていただいて魅力が伝わってきまして、佐藤愛子さんという方のお人柄も垣間見ることができてよかったです。それから恵美子さんのサポーターがあり本が出来上がっているんですね。そして秋を目指して本が出版されるいうことなので、それも楽しみにしたいと思っています。他に何かお考えになってることや予定、ご夫婦で考えてることなんかありますか？

近藤健

大きなことはないんですけども、とにかくその「書きたい」という人はいます。ただ何を書いているか分からないっていう人も、やっぱりいるんです。そういう人に勇気を持って書いていただいて、サポーターしたいと思っています。それと、書き手もたくさん増えてほしい、そこに寄与したいということなんです。

石山

近藤健

石山

ありがとうございます。一時間というのは